

下肢の引きずりがあっても大丈夫と記述する左片麻痺患者の1症例

○菅原 紘子¹⁾

1) 函館稜北病院

【はじめに】

下肢の引きずりを自覚したことで、屋外見守り歩行が可能となった。また歩容が崩れた時も共通のワードを他者が活用することで、歩行の安定性を維持することが可能となったので報告する。報告に際して本人に同意を得ている。

【症例】

右脳梗塞を発症した80歳代男性。約2ヶ月間の急性期治療を経て当院へ転院した。BRSは左上肢・手指V，下肢VI，感覚は軽度鈍麻，認知・注意機能の低下を認めた。独歩見守り～軽介助で、左下肢支持期～推進期に体幹前傾・骨盤後退・膝の軽度伸展，振り出し時に足先の引きずりが観察された。特に床面の素材が変化した際に出現しやすく屋外では軽介助が必要だった。引きずりは認識していたが、それにより安定性が低下していることへの自覚は低く、大丈夫だ。と発言した。下肢の大まかな関節覚や圧覚・触覚は認識可能だったが、左右の運動を細かく比較した際の認識は乏しく、歩行時も適切な関節覚や圧覚等へ注意を向けることが難しかった。また1人称的な運動イメージに対する記述が少なかった。前日行った訓練の細かい内容は確認をすれば思い出すことが可能であった。

【病態解釈・訓練】

注意機能の低下により、左下肢の足底圧や関節覚の情報が消去されやすく、運動イメージが構築出来ていないことにより、引きずりを自覚出来ないのではないかと考えた。歩行動画を観察してもらい引きずりへの気づきを促した。その際「かっこわるいな」という記述があり、どのように歩けばいいのかを視覚的に分析してもらった。また足底圧の変化に伴う膝関節の屈曲方向への運動を認識することで引きずりを軽減できると考え、①両下肢の運動の比較，②足底圧の変化を識別する課題，③足部に対する膝の空間的な位置を識別する課題を実施し、足底圧情報と膝の空間情報の統合を図った。介入により体幹前傾・骨盤後退が軽減，膝の屈曲が出現し引きずりが軽減した。「足が安定する感じがする」と記述し、その際「腰がしっかりする」というワードがあった。「足の運びが悪い」と引きずりを自覚した時に、そのワードを提示することで修正が可能となった。

【結果・考察】

屋外を見守りで歩行出来るようになり、ワードをご家族へ指導した。認知・注意機能低下がある症例でも、動画を使用した気づきの促し、十分に検討したワードを他者が使用することで、介助量軽減や行為の安定性を維持出来る可能性があるのではないかと考えた。